

# 葡萄水

宮沢賢治

青空文庫



## (一)

耕平は髪も角刈りで、おとなのくせに、今日は朝から口笛などを吹いてゐます。

畑の方の手があいて、こゝ二三日は、西の野原へ、葡萄ぶどうをとりに出られるやうになつたからです。

そこで耕平は、うしろのまつ黒戸棚とだなの中から、兵隊の上着を引っぱり出します。

一等卒の上着です。

いつでも野原へ出るときは、きつとこいつを着るのです。

空が光つて青いとき、黄いろなすぢの入つた兵隊服を着て、大  
手をふつて野原に行くのは、誰だつていゝたれ氣持ちです。

耕平だつて、もちろんです。大きげんでのっしのっしと、野原  
を歩いて参ります。

野原の草もいまではよほど硬くなつて、茶いろやけむりの穂を  
出したり、赤い実をむすんだり、中にはいそがしさうに今年のお  
しまひの小さな花を開いてゐるものもあります。

耕平は二へんも三べんも、大きく息をつきました。

野原の上の空などは、あんまり青くて、光つてうるんで、却かへつ  
て気の毒なくらゐです。

その気の毒なそらか、すきとほる風か、それともうしろの畑の

へりに立つて、玉蜀黍たうもろこしのやうな赤髪を、ぱちやぱちやした小さなはだしの子どもか誰か、とにかく斯かう歌つてゐます。

「馬こは、みんな、居なぐなた。

仔まつこ馬もみんな随ついで行いた。

いまであ野原もさあみしんぢや、

草くさばどひでりあめばかり。」

実は耕平もこの歌をききました。ききましたから却つて手を大きく振つて、

「ふん、一向さつぱりさみしぐないんぢや。」と云いつたのです。

野原はさびしくてもさびしくなくても、とにかく日光は明るくて、野葡萄はよく熟してゐます。そのさまざまな草の中を這はつて、

真つ黒に光つて熟してゐます。

そこで耕平は、葡萄をとりはじめました。そして誰でも、野原で一ぺん何かをとりはじめたら、仲々やめはしないものです。ですから耕平もかまはないで置いて、もう大丈夫です。今に晩方また来て見ませう。みなさんもなかなか忙がしいでせうから。

(二)

夕方です。向ふの山は群ぐんじやう青いろのごくおとなしい海鼠なまこのやうによこになり、耕平はせなかいっぱい荷物をしよつて、遠くの遠くのおくびのあたりの野原から、だんだん帰つて参ります。し

よつてゐるのはみな野葡萄の実にちがひありません。参ります、参ります。日暮れの草をどしやどしやふんで、もうすぐそこに來てゐます。やつて來ました。お早う、お早う。そら、

耕平は、一等卒の服を着て、

野原に行つて、

葡萄をいっぱいぶだうとつて來た、いゝだらう。

「ふん。あたりまいさ。あたりまいのごとだんぢや。」耕平が云つてゐます。

さうですとも、けだしあたりまへのことです。一日いっぱい葡萄ばかり見て、葡萄ばかりとつて、葡萄ばかり袋かへへつめこみながら、それで葡萄がめづらしいと云ふのなら、却かへつて耕平がいけな

いのです。

(三)

すっかり夜になりました。耕平のうちには黄いろのラムプがぼんやりついて、馬屋では馬もふんふん云つてゐます。

耕平は、さつき頬ほつぺたの光るくらゐご飯を沢山喰べましたので、まったく嬉うれしがって赤くなつて、ふうふう息をつきながら、大きな木鉢きぼちへ葡萄のつぶをパチャパチャむしつてゐます。

耕平のおかみさんは、ポツンポツンとむしつてゐます。

耕平の子は、葡萄の房を振りまはしたり、パチャンと投げたり



するだけです。何べん叱しかられてもまたやります。

「おゝ、青あゑい青あゑい、見める見める。」なんて云つてゐます。その黒光りの房の中に、ほんの一つか二つ、小さな青いつぶがまじつてゐるのです。

それが半分すきとほり、青くて堅くて、藍晶らんしやうせき石より奇麗で

す。あつと、これは失礼、青ぶだうさん、ごめんなさい。コンネテクカット大学校を、最優等で卒業しながら、まだこんなこと私は云つてゐるのですよ。みなさん、私がいけなかつたのです。宝石は宝石です。青い葡萄は青い葡萄です。それをくらべたりなんかして全く私がいけないのです。実際コンネテクカット大学校で、私の習つてきたことは、「お前はきよろきよろ、自分と人とをば

かりくらべてばかりゐてはならん。」といふことだけです。それで私は卒業したのです。全くどうも私がいけなかつたのです。いや、耕平さん。早く葡萄酒の粒を、みんな桶をけに入れて、軽く蓋ふたをしておやすみなさい。さよなら。

(四)

あれから丁度、今夜で三日になるのです。

おとなしい耕平のおかみさんが、葡萄酒のはひつたあの桶を、てかてかの板の間のまん中にひっぱり出しました。

子供はまはりをびよんびよんとびます。

耕平は今夜も赤く光つて、熱ほてつてフウフウ息をつきながら、だまつて立つて見てゐます。

おかみさんは赤漆塗あかうるしぬりの鉢はちの上に箕ざるを置いて、桶をけの中から半分潰つぶれた葡萄ぶどうの粒を、両手に掬すくつて、お握りを作るやうな工合ぐあひにしばりはじめました。

まつ黒な果汁は、見る見る鉢にたまります。

耕平はじつとしばらく見てゐましたが、いきなり高く叫びました。

「ぢや、今年あ、こいつさ砂糖入れるべな。」

「罰金取らへらんすぢや。」

「うんにや。税務署に見めつけらへれば、罰金取らへる。見めつけら

へないば、すつこすつこど葡<sup>ぶ</sup>ん萄<sup>ど</sup>酒<sup>しゆ</sup>呑<sup>の</sup>む。」

「なじよして蔵<sup>かぐ</sup>して置くあんす。」

「うん。砂糖入れで、すぐに今夜<sup>こんにや</sup>、瓶<sup>びん</sup>さ詰めましむべぢや。そして落しの中さ置くべすさ。瓶、去年なのな、あつたたぢやな。」

「瓶はあらんす。」

「そだら砂糖持つてこ。喜助あ先<sup>せん</sup>どな持つて来たけあぢや。」

「あん、あらんす。」

砂糖が来ました。耕平はそれを鉢の汁の中に投げ込んで掻<sup>か</sup>きまはし、その汁を今度は布の袋にあげました。袋はびんとはり切つてまつ赤なので、

「ほう、こいづはまるで牛<sup>べこ</sup>の胆<sup>きも</sup>のよだな。」と耕平が云ひました。

そのうちにおかみさんは流しでこちこち瓶を洗って持って来ました。

それから二人はせつせと汁を瓶につめて栓せんをしました。麦酒ビールび瓶びん二十本ばかり出来あがりました。「特製御葡萄水」といふ、去年のはり紙のあるのもあります。このはり紙はこの辺で共同でこしらへたのです。

これをはって売るので。さやう、去年はみんなで四十本ばかりこしらへました。もちろん砂糖は入れませんでした。砂糖を入れると酒になるので、罰金です。その四十本のうち、十本ばかりはほかのうちのやうに、一本三十銭づつで町の者に売ってやりましたが、残りは毎晩耕平が、

「うう、渋、うう、酸っかい。湧い<sup>わ</sup>でるぢやい。」なんて云ひながら、一本づつだんだんのんでしまったのでした。

さて瓶がずらりと板の間にならんで、まるでキラキラします。

おかみさんは足もとの板をはづして床下の落しに入つて、そこからこつちに顔を出しました。

耕平は、

「さあ、いゝが。落すな。瓶の脚揃<sup>そろ</sup>えでげ。」なんて云ひながら、それを一本づつ渡します。

耕平は、潰し葡萄を絞りあげ、

砂糖を加へ、

瓶<sup>びん</sup>にたくさんつめこんだ。

と斯<sup>か</sup>う云ふわけです。

(五)

あれから六日たちました。

向ふの山は雪でまっ白です。

草は黄いろに、をととひなどはみぞれさへちよつと降りました。耕平とおかみさんとは家の前で豆を叩<sup>たた</sup>いて居<sup>を</sup>りました。

そのひるすぎの三時頃<sup>ころ</sup>、西の方には縮れた白い雲がひどく光つて、どうも何かしらあぶないことが起りさうでした。そこで

「ボツ」といふ爆発のやうな音が、どこからとなく聞えて来まし

た。耕平は豆を叩く手をやめました。

「ぢや、今の音聴だが。」

「何だべあんす。」

「きつとどの山が噴火したな。秋田の鳥海山だべが。よつぽど遠くの方だよだぢやい。」

「ボツ。」音がまた聞えます。

「はあでな、又やった。きたいだな。」

「ボツ。」

「をおがしな。」

「どこだべあんす。」

「どこでもいがべ。此処ここまで来ないがべ。」



それからずうつとしばらくたつて、又音がします。

それからしばらくはらくしばらくたつてから、又聞えます。

その西の空の眼めの痛いほど光る雲か、すきとほる風か、それとも向ふの柏かしはばやし林の中にはひつた小さな黒い影法師か、とにかく誰たれかが斯う歌ひました。

「一昨日をどでな、みいぞれ降つたれば

すゞらんの実い、みんな赤ぐなて、

雪の支度のしろうさぎあ、

きいらりきいらど齒あみがぐ。」

ところが

「ボツ。」

音はまだやみません。

耕平はしばらく馬のやうに耳を立てて、じつとその方角を聴いてゐましたが、俄にはかに飛びあがりました。

「あつ葡萄酒ぶだうしゆだ、葡萄酒だ。葡ぶん葡萄酒はじけでるぢや。」

家の中へ飛び込んで落しの蓋ふたをとつて見ますと、たしかに二十本の葡萄酒の瓶びんは、大抵はじけて黒い立派な葡萄酒は、落しの底にながれてゐます。

耕平はすっかり怒つて、かるわざの股ももひき引のやうに、半分赤く染まつた大根を引っぱり出して、いきなり板の間に投げつけます。さあ、そこでこんどこそは、

耕平が、そつとしまつた葡萄酒は

順序たゞしく

みんなはじけてなくなつた。

と斯<sup>か</sup>う云ふわけです。

どうです、今度も耕平はこの前のときのやうに

「ふん、一向さつぱり当<sup>あ</sup>り前<sup>だ</sup>あだんぢや。」と云ひますか。云ひはしません。参つたのです。



# 青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十卷」筑摩書房

1979（昭和54）年9月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年4月20日初版第5刷発行

入力：田代信行

校正：今井忠夫

2003年4月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 葡萄水

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>